

企画の辞



個人的な話で恐縮ですが、私は日本に留学する以前に故金知見博士にお目にかかったことはありませんでした。釜山大学出身の私はソウルを中心に活動された博士の講義を拝聴する機会に恵まれなかったからです。私にとって博士は、いわば雲の上の存在だったのです。何故なら韓国で仏教を専攻する学生なら博士の名を聞いたり、あるいはその著作や論文に接した経験のない者はいないからです。にもかかわらず私は、博士が東京大学の先輩に当たることすら、自身が東京大学の留学生になって初めて知ったのでした。

私が博士に初めてお目にかかったのは2000年秋頃と記憶しています。韓国留学生インド学仏教学研究会の副会長を任されたばかりの私は、そのときやっと博士を訪問する機会を得たのでした。当時博士は東京大学人文社会系研究科の客員研究員として来日され、新宿の常円寺にお住まいになっていたのですが、既に病重く、私のご挨拶はお見舞いかたがたという形となりました。私をご覧になった博士の、「あなたは元気でいいですね」という一言が今も胸に残っています。それが私が博士とお会いした、最初で最後となってしまったことが残念でなりません。

韓国留学生インド学仏教学研究会の前身は新羅仏教研究会と言い、1970年代始め、東京大学に留学中であった故博士ほか数名が創立した研究会でした。その後1985年より学術誌『韓国仏教学セミナー』の刊行を開始し、第6号(1995年)以降は韓国留学生インド学仏教学研究会の名義で発刊しております。そういう関係もあり、研究会創立者でもある博士の葬儀には我々会員が率先して駆けつけ、及ばずながらお手伝いさせて戴いた次第です。実はその時李館淑会長と私とは『韓国仏教学セミナー』第9号のテーマで悩んでいる最中でした。というのも、本誌は留学生の編集発行する雑誌でありながら、第6号<日本のインド哲学、仏教学研究—その歴史と現況>及び第8号<日本における

韓国仏教思想の研究の成果と展望>がその年の韓国文教部(日本の文部省に当たる機関)の優秀図書に選ばれるという荣誉に輝いた実績があるだけに、我々としては責任を感じざるを得なかったからです。そこで、韓国側と故人の奥様の意向を確認した後、本誌第9号は故金知見博士追悼論文集として故人に捧げる内容となったのでした。

論文集準備は難航を極めました。第一に人力と時間の不足です。本会の現会員数は十人程度、うち論文準備の者を除くと編集に参加できる人数はわずかに二、三人に過ぎず、また学業や生活上の雑事にかまけ、十分な時間を割くことが困難でした。第二に追悼論文執筆者の人選の問題です。実を申せば当会会員中に博士の生前の詳しい交友関係を知る者が少なかった関係上、然るべき方々に寄稿を願わなかったケースもあろうかと思えます。この場をお借りして御容赦を願う次第です。この論文集が故博士の輝かしい学問業績の有終の美を飾るにささやかながら助する所あらば、この上ない光栄と存じます。

最後になりましたが、8号に引き続き9号の無料印刷を許可して戴きました釋圓澤和尚と藏経閣の皆様、並びに論文集刊行に尊い布施を賜りました方々に心からの感謝の意を捧げる次第です。

韓国留学生インド学仏教学研究会
副会長 鄭榮植



故 金知見 博士 影幀